



愛知淑徳大学

## ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES  
Newsletter

第27号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>発行年月日：2009年3月20日  
〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9  
Phone 0561-62-4111 EX 2498  
FAX 0561-63-9308  
E-mail : [igws@asu.aasa.ac.jp](mailto:igws@asu.aasa.ac.jp)

## IGWS 第27号ニュースレターの目次

|   |   |
|---|---|
| ○ 第20回定例セミナー報告 .....  | 1 |
| ○ 学生感想文 .....   | 3 |
| ○ 私のキャリア・プランー税理士を目指して会計事務所で働く .....                                 | 4 |
| ○ Tongues and Bodies in Translation: what a title can tell us ..... | 5 |
| ○ 第2回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 .....  | 6 |
| ○ 学生感想文 / 研究所からのお知らせ .....  | 7 |
| ○ 2009年度前期ジェンダー関連授業紹介 .....   | 8 |

星が丘キャンパスにおいて、2008年10月30日(木)に第20回定例セミナー「恋愛と暴力デートDVにおける力と支配の関係」を開催いたしました。以下はその概要です。

第20回  
定例  
セミナー

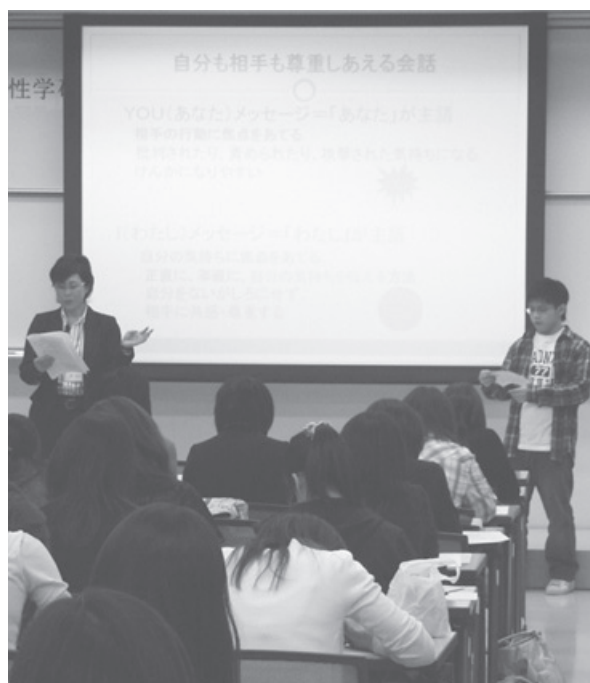
## 恋愛と暴力デートDVにおける力と支配の関係

講師 具 ゆりさん  
(アウェア認定デートDV防止教育プログラムファシリテーター)

最近、DV（ドメスティック・バイオレンス）という言葉が耳にすることが多く、2008年にはテレビドラマでも大きく扱われました。ところが、男女共同参画に関する愛知県の調査では、DVという言葉は83%もの人々が知っているにもかかわらず、DVの相談窓口を知っているとする人の割合は49.5%にとどまっています。このようにDVにどう対処したらよいかまではあまり知られていないのが現状です。この傾向は本学の学生も含む20歳代の若年層に顕著にみられます。

そこで今回の定例セミナーは、DVのない社会を目指して活動している団体「アウェア」でデートDV防止教育プログラムのファシリテーターを務めているフェミニスト・カウンセラーの具ゆり氏を迎えて、DVのなかでも恋人同士の間や異性の友人間で行なわれる「デートDV」をテーマにお話しを伺いました。

講演は以下のデートDVに関するアンケート項目を、聴講している学生に問いかけるかたちで始められました。



1. 好きになって、つきあっている人から暴力をふるわれる人なんて、めったにいない。
2. デート相手からの暴力なんて、おきたとしても、きっとそのときだけのことだ。
3. 数回デートしたら「相手は自分のものだ」と思っている。
4. 暴力は、お互いに嫌いになって別れそうになったときおきる。
5. 男性が暴力的・攻撃的なのは男らしい。
6. 暴力をふるわれるのは、ふるわれるほうに理由があるからだ
7. 相手を見下すようなことを言ったり、ばかにしたり、どなったりするのは、暴力のうちに入らない。
8. 望んでいないのに、セックスしてしまう人なんていない。
9. つきあっていれば、相手の携帯メールや、着信履歴をチェックするのは、あたりまえだ。
10. うんと親しくなれば、相手がいやがることをしたり、行動をしぼったりすることがあっても仕方ない。
12. たとえ暴力をふるったとしても、ちゃんと謝ったら許してあげるべきだ。

これらの質問に対しては、女性は否定的な反応を示し、男性は「付き合っている相手は自分のものである」という意識から肯定的な回答を示すことが多いということでした。具氏はこれについて、相手が好きだからといって、行動をしぼるのは間違いであり、「束縛」は愛情ではなく「独占欲」であるとして、DV（デートDV）が『力と支配（パワーとコントロール）』のあらわれであり、男女関係のもつ権力的性格が内在しているという分析を提示されました。

しかも、こうしたDVは身体的暴力や性的暴力というかたちだけでなく、ことばによる精神的暴力（こころへの暴力）やお金を取り上げるなどの経済的暴力、そして行動を監視したり電子メールをチェックするといった社会的暴力というかたちでも行われるため、それによって被害者（おもに女性）は恐怖や無力感、孤立感を覚えるところまで追い込まれてしまいます。具氏は、このような男女関係に存在する権力的性格がジェンダー＝社会的・文化的性別役割意識（社会にある男らしさ、女らしさの価値観）に由来するものであるということについて、自らの内側にジェンダー・バイアス（固定観念・偏見）はないだろうか、大塚愛のヒットソング「甘えんぼ」やテレビドラマの中でTOKIOの長瀬智也が歌った「お前やないとあかんねん」といった具体的な例を紹介しながら学生に問いかけていました。

講演の最後は、自分で選ぶ、自分で決める「自分らしさ」を大切にして、偏った「女らしさ」「男らしさ」にしぼられない生き方をすることの必要性がテーマと

なりました。そのためには、相手の行動に焦点をあてる「YOU（あなた）メッセージ」ではなく、自分の気持ちに焦点をあて、正直に、率直に、自分の気持ちを伝え、相手に共感・尊重する「I（わたし）メッセージ」によって自分も相手も尊重しあえる会話を行っていくことが大切であることを示されました。特にDVのおもな被害者であり、今回の講演の聴衆の多くを占めていた女子学生に対しては、大切な「自分の心とからだ」を守るために、「断る」、「離れる」、「逃げる」そして「話す」ことの重要性を強く訴えていました。

ふだんからデートDV防止教育プログラムのファシリテーターとして、高校生を中心に多くの講演を経験されている具氏の語り口は、やさしいながらもきっぱりと説得力に満ち、ときに学生をステージに立たせてロールプレイングを求めるなど、90分という講演時間が短くさえ感じられました。

また、学生の中には「彼氏（彼女）の暴力」を実際に受けている者や、学生自身ではないにせよ、暴力を受けている友人知人がいたりする者も多かったものとみられ、聴講した学生の関心も高かったようです。

ジェンダー・女性学研究所の定例セミナーは、女子学生の比率が高いという本学の特色を踏まえて女性をターゲットにした企画が多く行なわれ、今回もまたDVの主たる被害者である女性をターゲットとした講演でした。ただ、具氏も指摘されたように、DVの背景には社会的・文化的性別役割意識に由来するジェンダー・バイアスが存在しています。今回の講演がたんなるDV対策ではなく、男性も含めたジェンダー全体を考える契機となることが期待されます。

（文責 IGWS 運営委員 若松孝司）



# 学生感想文

私は最近よく耳にする「デートDV」について興味がありました。だからといってデートDVの経験があるわけではなく、ドラマ「ラストフレンズ」からの影響でした。「ラストフレンズ」を見るまでは正直、デートDVに興味がなく、どこか他人事として片付けていました。「ラストフレンズ」を見てデートDVの深刻さや恐怖感を感じました。付き合い始めた頃は優しい彼でも、付き合い始めて時間が経つと彼女の存在を自分の所有物のように扱い、「男友達のメールアドレスを消せ」だとかメールのチェック、携帯電話で行動を24時間監視するなど、携帯電話の存在はもはや彼女を監視する道具になってしまっているのです。自分の気に入らないことがあると彼女に暴力をふるい、その後は「ごめんね、もうしないから」と泣いて謝る彼。そんなことを言われたら多くの女の子は彼を許してしまうのではないのでしょうか。自分から好きになった人ならなおさらです。「彼に嫌われるぐらいなら、私が我慢すれば済むこと」と多くの女の子は思ってしまうでしょう。また、身体的に傷つける暴力だけでなく、言葉の暴力で相手を傷つけることもあるのです。

今回、具先生の講演会の中で「7人に1人の女性が交際相手から身体的・心理的・性的暴力を受けている」というデータが数字で出てきました。この数字は決して少ない数字ではないと感じました。そして、2006年には合意のない性行為によって6万7000人の女性（10代）が妊娠をしていて、心だけでなく体も傷つけられているのです。体への暴力は治療をすれば治るかもしれませんが、言葉による暴力は体への暴

最近、ドラマなどで取り上げられ、DVについて様々なところで耳にする機会が増えてきたように思います。しかし、私はDVをどこか他人事のように、あまり身近には感じていませんでした。

今回の講演で夫婦間では3人に1人、交際相手では7人に1人が何らかのDV被害に遭っているという現実のお話を聞き、決して関係の無い話ではなく、誰にでも起こりうる可能性があるということを知りました。また、私が今まで考えていたDVとは認識が違った部分が多くあり、DVについて認識を新たにすることができました。一つは交際している人たちの暴力のほとんどは仲が深まった時に、相手を自分の所有物のように思ってしまうところから始まり、一度おきるとまたおきやすいということです。また、相手を自分の所有物のように思ってしまうと、相手を自分の思い通りにコントロールしようとし、自分の力を見せつけるために暴力を振るいます。このような暴力は相手を孤立させ、無力感や恐怖をもたらします。私たちは普段、

## 下地 礼子

力以上に彼女を傷つけ、自尊心を奪ってしまうのです。講演会の中で具先生が言われた「どんなに彼女が悪くても暴力をしていい理由にはならない」「束縛は愛情ではなく、独占欲」という2つのことに関して私はすごく納得させられました。そして、「ドメスティック・バイオレンスを「DV」と略すと軽く感じる」と言われたのには大ききうなずいてしまい、デートDVの深刻さについて1人でも多くの人に知ってもらう必要があると思いました。

具先生の講演会を聞いて、自分が持っているデートDVについての曖昧だった知識が明確になりました。大塚愛や桜庭裕一郎（長瀬智也）の歌う歌詞の中にもジェンダーは潜んでいて、ジェンダー問題は私たちの身近にあるものだと改めて感じました。また、講演会を通して恋人間でも夫婦間においてもお互いに対等な関係で、思いやる気持ちを持つことが大切だと感じ、「愛することは生きる力になる」と先生が最後におっしゃっていたのですが、私はその言葉に強く共感しました。愛する人の存在がどれだけ自分に生きている意味を教えてくれるのか、それは生きていることに幸せを感じる瞬間でもあります。そして、相手を暴力で引き止めることはできない、つまり「恋愛に暴力は必要ない」ということを具先生に教えていただきました。1度しかない自分の人生を後悔しないように生きるのが私のモットーであり、具先生の講演会は私の人生においてプラスになるものでした。本当にありがとうございました。

（本学医療福祉学部福祉貢献学科3年）

## 武藤あずみ

交際相手とうまくいっている時にこの仲の良い状態を何とか保ちたいと考え、少し自分が我慢をして、相手の機嫌を取ろうと行動することがあると思います。また、気がつかないうちにジェンダーの固定観念や偏見に縛られた考え方をし、自分の考えを押し付けていることがあります。このような普段から行っている行動や考えが一步間違うと、DVに繋がっていくことがあるのだということを知り、考えていた以上に身近な存在であるということに驚きました。

大切なことは、普段の行動や考えからジェンダーに縛られないようにすることや相手の顔を窺って決めるのではなく自分で勇気を持って決定していけるようにすることであると教えていただき、今後自分で行動できるようになることが必要であると感じました。今回の講演で新たに学んだことが多くあり、私たちがそれぞれDVの認識や知識、対応を考えていく良い機会になったと感じています。

（本学医療福祉学部福祉貢献学科3年）

## 私のキャリア・プラン～税理士を目指して会計事務所で働く～

成田 佳恵

現在、私は会計事務所で働きながら、税理士を目指して勉強しています。会計事務所での仕事内容は、主に会社や個人のお客様の税務申告や経営・財産の相談です。

私は、2004年にコミュニケーション学部ビジネスコミュニケーション学科（現：ビジネス学部ビジネス学科）を卒業し、卒業論文には、基幹労働者としての女性の働き方について國信先生の指導で執筆しました。その後、新卒で住宅販売関連会社で派遣社員として2年間一般事務の仕事をしました。そして、現在担当している税務申告の仕事の内容としては、申告する内容の把握・作業はもちろん、多種の税金との兼ね合いによる対策等、専門知識と経験を必要とする仕事です。また、経営・財産の相談においては、お客様の経営計画や財産内容などの個人的な情報を取り扱うため、顧客との信頼関係が重要です。現在の仕事は、このように税務の専門知識と顧客との信頼関係を築くためのコミュニケーション能力がどちらもかかせないものであり、身につけていく必要性があります。

私が現在の仕事に就くことに決めた理由は2つあります。第一に、大学在学中にゼミでジェンダー関連領域について学習した私は、日本女性の働き方、家庭・育児と仕事の両立について問題意識を持つようになり、女性の多くが結婚・出産後の働き方に非正規雇用を選択している、または選択せざるをえない状況であることについて調査しました。学生時代もそんな状況の中でも、まだ少ない専門職を持った女性のキャリアを先頭に立って道を切り開いていけるような女性になりたいと思っていました。第二には、大学在学中に会計学に興味があり、勉強していました。将来は会計の知識を生かせる仕事に就きたいと思いつつも、公認会計士や税理士他、どの道に進もうか当時悩んでいた私は、ひとまず住宅販売関連の一般企業に勤めることにしました。その間、関わった外注先の方々は100社を超え、その経営者の方々やそこで働く従業員の方たちと関わるうちに、そういった方々のお役に立つことのできる税理士の業務内容が私が就きたいキャリアにぴったりであることがわかり、会計事務所で働きながら税理士を目指すことにしました。今目指している税理士の資格が取得できれば、その専門知識を生かして業務を行っていく仕事なので、独立や自宅での仕事等も可能性があり、結婚・出産をした後も専門職として継続可能であると期待しています。

今後の目標と自分の希望としては、現在は、税理士の資格を取得することが最優先で、将来は仕事とプライベートの両立をしていけるようになりたいと考えています。結婚・出産をする時が来たら、私は家事も育児もしっかりこなしていきたいと思っています。仕事も辞めることなく、夫とも協力し、必要ならば在宅の業務に切り替えるなどして継続していきたいとも思っています。この2つの両立を実現するために今からもプライベートと仕事のバランスをコントロールしながら、両方実現させていきたいと考えています。現在は、将来のために仕事に使う時間がかなり多くはなっていますが、その分プライベートの短い時間を有効的に使えるようになりました。つまり、ワーク・ライフ・バランス（仕事と家庭形成の両面を実現する）のある生活を実現することが目標です。また、男女平等などジェンダーに敏感な意識を持ち続けながらずっと働いていましたし、これからもそれは持ち続け、自分にとってのテーマでもあります。

私自身の中で確立してきている考え方としては、男女差別することなく、昇格・昇進は行われるべきであるという考えは大学生の頃から変わってはいません。それに加え、女性として社会で働いて感じたことは、「女性らしさ」とは重要で「配慮ある人間」としての特性を持ち続けて働きたいと思いました。私にとっての「女性らしさ」とは、具体的にどんなことかということ、優しさ、しなやかさ、心遣いなどで、これらの特性はどんな職場においても男女ともに必要であるように思います。専門知識も身につけて社会に貢献し、その一方で家庭も持つことのできる、そのような人間になっていきたいと思っています。

このように現在では目標もはっきりとして将来の姿が思い描けるようになってきましたが、大学在学中から社会人になって1年目までは、漠然と理想の姿は思い描けるものの、具体的にどんな職種でどのように進んでいけばよいのかが決まらず、大変悩んでいた時期がありました。そんな時に支えてアドバイスをくれた家族、先生方、諸先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです。今も応援し、見守ってくださる方々に応えられようこれからも頑張っていきたいと思っています。

（本学コミュニケーション学部  
ビジネスコミュニケーション学科 2004年卒業）

## Tongues and Bodies in Translation: what a title can tell us Beverley Curran



Over the past few years, I have been investigating the complex interaction of tongues and bodies in translation and theatre and how they are reconstituted under different cultural conditions. Specifically, I have looked at languages and scripts making their way through the tongues and bodies of Japanese translators and actors in contemporary Japan. In this brief paper, I would like to consider the translation of the title of just one of these plays in order to suggest how theatre translation draws attention to the ways in which language can be used to speak for or against the body.

I would like to examine the title of *Blues for Mister Charlie* (1964), a play by African American writer James Baldwin. In his inaugural address in January, American president Barack Obama referred to the significance of that historic celebration in light of the fact that his father “less than sixty years ago might not have been served at a local restaurant.” That earlier time in America is the setting James Baldwin’s play, *Blues for Mister Charlie* (1964), which is loosely based on the case of Emmett Till, a fourteen-year-old African American murdered in Mississippi in 1955. In the title, and throughout the play, Baldwin code switches between English and African American Vernacular English (AAVE), a distinct speech developed in America under conditions of slavery, segregation and danger. “Mister Charlie” is a derisive reference to the “white master,” but it is a term used only by black speakers for black listeners.

Black speech in Baldwin’s play demands recognition from the translator, too, who must approach its use in the text as a counter discourse and not just a dialect. In other words, language has a very important *role* in *Blues for Mister Charlie*. The play’s Japanese translator was Hashimoto Fukuo, who was deeply interested in black American writers. In this case, however, he does not seem to recognize the crucial character played by the African American vernacular. In an attempt to prioritize clarity, Hashimoto translates the title of the play as 「白人へのブルース」 rendering ‘Mister Charlie’ as *hakujin*, a transparent and drastically oversimplified translation can not be identified as a black term ironically framing whiteness.

Also erased is the significance of ‘Mister Charlie’ as a gendered term. In the 60s, the focus was on racial inequality; the implications of the civil rights movement in terms of gender and sexuality were not yet fully recognized. In 1960, *Esquire* magazine published “Fifth Avenue, Uptown,” an essay by Baldwin, in which he states “*Negroes want to be treated like men*: a perfectly straightforward statement, containing only seven words.” Cora Kaplan has pointed out the “routine slippage” that elides ‘Negroes’ with black men, “virtually including but actually suppressing what black women might or might not ‘want’” (28), but Baldwin was also likely aware of at least some of the complicated semantics of his ‘straightforward’ statement from his perspective as a black man who fled to Paris to escape not only racism in America but homophobia in Harlem.

Hashimoto was not a careless translator, but when he translated the title of Baldwin’s play, he was more interested in the meaning of ‘the blues’ than ‘Mister Charlie’ and thus did not see the linguistic performance previewed in the play’s title. In his *atogaki*, the translator sees Richard’s death as representative of “the sad destiny of not just blacks, but that of all peoples damaged by oppression.” He saw the young black blues singer murdered at the very beginning of the play not only as the death of a black man in America, but a narrative shared by, for example, the *burakumin* or *zainichi* Koreans in Japan; the programme for the 1967 performances of the play by Tokyo Geijutsuza clearly does, too. Thus in translation, the terms of the debate inscribed in Baldwin’s play continue, but are also reworked in a different tongue and by different bodies.

How could “Mister Charlie” be translated in 2009 so that these ideas resonate in the title? How about 「Mr. 白人へのブルース」, or 「白人の旦那へのブルース」?

### Works Cited

Baldwin, James. *Blues for Mister Charlie: A Play*. London: Michael Joseph, 1965; 「白人へのブルース」 trans. Hashimoto Fukuo. Tokyo: Shinchosha, 1966.

Kaplan, Cora. “‘A Cavern Opened in My Mind’: The Poetics of Homosexuality and the Politics of Masculinity in James Baldwin.” *Representing Black Men*. Eds. Marcellus Blout and George P Cunningham. New York, London: Routledge, 27-54.

(本学文化創造学部教授)

### 〈要約〉 ■■■■■ 翻訳における言葉と身体：題名の実例 ベヴァリー・カーレン ■■■■■

私は過去数年、翻訳や演劇における言葉と身体との複雑な相互作用やそれらが異文化の状況下でどのように再現されているかを、特に日本の翻訳家による俳優の言葉 (tongue) と身体を通して表出される言語とを研究してきた。本稿では、翻訳しだいでどのように言語が身体を代弁したり批判したりできるかを示唆する演劇のタイトルの翻訳について考察したい。アメリカ大統領オバマ氏の就任演説で、60年前の彼の父の時代に分離されたアメリカは、ジェームズ・ボールドウィンの戯曲の背景と重なる。この戯曲は、1955年ミシシッピ州で殺された14歳のアフリカ系アメリカ人、エメット・ティルの事件を元としている。ボールドウィンの戯曲における黒人の話は、翻訳者による理解も必要であり、黒人言語の使用についても考慮しなければならない。『Blues for Mister Charlie』(橋本福夫訳『白人へのブルース』)の中で、黒人の言葉は重要な役割を持っている。日本の翻訳家、橋本福夫は、黒人のアメリカ作家に造詣が深い、戯曲の中で黒人が「黒人の言葉」を使っていたことを理解してはいないようだ。明快さを優先させようとして、「ミスター・チャーリー」を『白人』と訳してしまっている。明快で大胆に単純化しすぎた翻訳は、白さを皮肉る黒人言語ではない。

またジェンダー用語としての「ミスター・チャーリー」の意義も失われている。1960年、ボールドウィンはエッセー「5番街」において、「単刀直入に“ニグロ (Negroes) は人間 (men) らしく扱われたい」と述べている。批評家コーラ・カプランも、「ニグロ」を「黒人男性」でひとくくりする「お決まりのずれ」を指摘し、現実には抑圧されている黒人女性はどうかと異議を申し立てる。しかしボールドウィンは、アメリカの人種差別だけでなくハーレムの同性愛恐怖からパリに逃れた黒人としての視点から、「単刀直入に」と述べてはいるが、単純な「Negroes」や「men」という表現に複雑な意味がある事に気づいているようだ。翻訳者は、ボールドウィンの戯曲のタイトルに「ブルース」という意味が音楽的形式や感情を意味するものとして興味をもち、抑圧された全ての民族の悲しい運命を代弁していると解釈している。言い換えれば、橋本はアメリカ戯曲の特異性を認識しているものの、1967年に東京芸術座が上演した「部落民」や「在日朝鮮人」と共有できる物語としてもとらえている。このように、翻訳におけるボールドウィンの戯曲につけられたタイトルの論争は続いていく。

(文責 本学文学研究科博士後期課程英文学専攻 平山千鶴子)

第2回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会  
2009年1月28日(水) 長久手キャンパス 233 教室開催

昨年度に続いて、2回目となるジェンダー・バイアスに意識的な卒業論文報告会を開催しました。

今年度は現代社会学科より1名、ビジネス学科より2名、国文学科より1名、英文学科より2名、合計6名の報告がありました。また学生、教職員など多数の聴講があり、フロアからの質疑応答が続きました。昨年と同様ジェンダー視点を共有し合う新たな刺激の場所となりました。以下は報告者の顔触れと、卒業論文のタイトルです。

「鏡を見つめる瞳の奥を探る  
——いまだき男子の  
見た目志向研究」



現代社会学部現代社会学科  
田中 春那

「労働環境の変容と少子化社会  
——晩婚化との関連性の考察」



ビジネス学部ビジネス学科  
井上 遥歌

「非正規雇用者の実態と課題  
——国際比較から」



ビジネス学部ビジネス学科  
丹羽 菜月

「誰のものでもないヒロイン  
——旅人キノの透明な個性」



文学部国文学科  
横内沙友里

「『オペラ座の怪人』における  
三角関係」



文学部英文学科  
竹島なつ紀

「『ピーター・パン』における  
「子ども」の島」



文学部英文学科  
村井 万穂

報告会の後に茶話会を開催し、  
終始和やかな雰囲気でした。



## 第2回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会

感想文

杉浦 一彰

男でも女でもこだわらなくていいと思っています。男女である前に人間です。

『インターセックス』、帚木蓬生、集英社、2008年

情報科学技術の発達は、豊かさとともにそれまで看過されてきた社会の歪みも明らかにした。ジェンダーもその一つであり、様々な場所で問題提起がなされるようになった。

時代の趨勢を反映するように、「ジェンダー視点の卒業論文」報告会では、学部・学科の垣根を越えて6人の発表者が研究成果を報告した。僅かな時間であったが、どれも卒業論文の本質が凝縮されていた。外見に固執する今どきの男性について、「見られる存在」への変容を指摘したもの、女性の社会進出と晩婚化との相関性から法整備の重要性を訴えるもの、最近話題の日本の非正規雇用者の実態について諸外国との比較からワーク・ライフ・バランスの必要性を指摘するものなど、いずれも現代社会の抱える問題を鋭く問いかける。多方面では、『キノ』の人物造型や『オペラ座の怪人』の三角関係、さらには『ピーター・パン』の物語世界などのように、ジャンルを問わず新たな視点で作品を読み解いている。それぞれの専門知識を存分に活かした実証報告であり、横断的にジェンダー視点の可能性を知り得た。

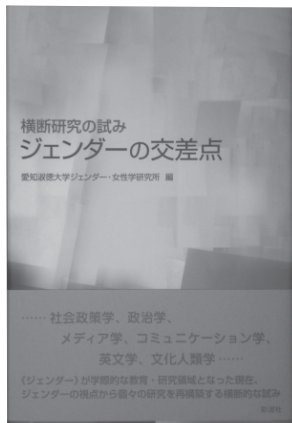
時代は<sup>change</sup>変革の時を迎えている。しかし、既成観念として根強いジェンダーの壁はいまだに残存する。旧弊的な価値観や態度に縛られては現代を生きることは困難だろう。わたしは報告会に参加したことで、確かに「人間」の生を実感し、問題解決の活路を見出した。

(本学文学研究科文学専攻国文学コース 博士後期課程1年)

## ジェンダー・女性学研究所からのお知らせ

### 書籍紹介

『ジェンダーの交差点—横断研究の試み』  
(ジェンダー・女性学研究所編 彩流社 2009)



本研究所が平成19年度と20年度に愛知淑徳大学特別教育研究助成を授与し、その成果として本書が出版された。愛知淑徳大学の(元)専任教員7名が執筆した論文集は、社会政策学、政治学、メディア学、コミュニケーション学、英文学、文化人類学と多岐にわたり、ジェンダーの視点が専門分野を横断する学際的な研究書である。

執筆者：石田好江、小川明子、永田祐、平林美都子、  
藤井麻湖、福本明子、若松孝司

### 研究所パンフレットをリニューアルしました。

今後も皆様方にとってご利用しやすい研究所を目指します。

どうぞ宜しくお願い致します。



〈2009年度前期〉 21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人も受講できます)

## 愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

**ビジネスとジェンダーⅠ** 長久手  
講師 / 國信潤子

**【授業の概要】**

主に産業社会学の視点からビジネス関係、労働環境におけるジェンダー(社会・文化的性)区分の実態を国内外の男女別統計データなどから検討し、雇用機会均等法、男女共同参画社会基本法などの法制整備によって改善がみられるか、について検討し、事例などを紹介しながら現状を理解し、解決の方向を探る。

**ジェンダーと社会** 長久手・星が丘  
講師 / 中島美幸

**【授業の概要】**

文学作品を始めとする「表現」を取り上げ、「女」「男」がどのように描かれているか、また、なぜそのように「女」「男」が描かれたのか、社会的・歴史的・心理的視点から考える。また、「表現」された「女」「男」によって、社会や個人がいかにか固定的なイメージに縛られているかを認識し、さらに、固着したイメージから自由な、現実の多様な女と男の生と性を「表現」に探る。

**女性学・男性学** 長久手・星が丘  
講師 / 中島美幸

**【授業の概要】**

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

**比較文化** 長久手  
講師 / 星山幸子

**【授業の概要】**

国際化が進み、世界の文化について触れる機会が多くなってきた。この授業では、文化を考察する上で必要な概念について学ぶことによって、種々の文化の特徴について考える。さらに、異文化交流についても講義する。

その際、民族、国家、南北問題、ジェンダー等といったさまざまな視点から文化について考える。とくに、イスラームの文化の事例も授業のなかで取り上げる。

**ジェンダー論** 長久手

講師 / 石田好江・小久保潤子・小川明子

**【授業の概要】**

ジェンダー(gender)という言葉は、おおよそ「社会的・文化的に形成された性」「社会的規範としての性役割」といった意味で用いられている。ジェンダーという概念を使用することは、単に「性別の捉え方」の問題(生物学的な性別への異議申し立て)にとどまらず、現代社会及びその知の持つ偏りや多様性を認識し、これまでとは違った新しい問題を発見することを可能にする。その意味では、ジェンダーは現代社会の現実をよりよく認識するための道具であるといえる。

本講義では、メディア・コミュニケーション、文化、社会システム等をジェンダーという道具を用いて捉えなおすことを目的としている。

**ジェンダー特講Ⅰ・Ⅱ** 長久手  
講師 / 國信潤子

**【授業の概要】**

産業社会学の領域である。ジェンダー(社会文化的性による格差)に敏感な視点で国内外の男女雇用機会均等の実態、労使関係、正規雇用者と非正規雇用者との格差、家庭の責任を持つ労働者の問題など有償・無償労働の両面について、産業社会学の手法で比較検討する。各種資料、統計データ等から、生活、ビジネス、地域などでの性別役割の実態、さらに経済活動における男女の組織関係、行動様式および意思決定などにおけるジェンダー間異同を検討する。

**女性学・男性学** 長久手  
講師 / 竹信三恵子

**【授業の概要】**

少子化時代に不可欠といわれるワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の両立)が、戦後の日本社会でなぜ阻害されてきたのかを、新聞記者としての取材の成果を通じて明らかにし、その実現へ向けた方策をさぐる。



愛知淑徳大学エクステンションセンター

これらの講座履修・申し込み先

〒464-8671 名古屋市中種区桜が丘23 TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)  
受付日時(月~金) 9:00 ~ 17:00 ホームページアドレス <http://www.aasu.ac.jp>

### 編集後記

27号では、近年話題に上っている「デートDV」の講演の報告を掲載いたしました。講演は学生らのロールプレイングを通して、よりよい関係性を築くコミュニケーションのあり方など、実践的な内容も豊富でした。身近な人間関係を見直し、対等で尊重し合える関係について考えるきっかけとなりました。また、「お知らせ」では研究所編纂の書籍と、研究所パンフレットの紹介を致しました。是非ご覧ください。(高橋 博子)

### ASU・IGWS2009年度

運営委員

平林美都子(所長兼)、石田好江、  
國信潤子、米倉五郎、若松孝司、  
西 和久、佐藤実芳

事務担当

高橋博子